

OPIにおける英語話者の「の」の使用と習得

坪根 由香里

[要旨]

準体助詞「の」は、名詞の代用語、前接する用言の名詞化といった機能の他に、文末の「のだ」の形でムードを表したり、また「のだが」のような接続表現としての用法もあり、その習得は、日本語で正しく意思を伝えるために欠かせないものである。本研究は英語話者のOPIデータを用い、準体助詞「の」の使用状況と習得について調査したものである。

調査の結果、中級-中上段階までで、代用語、名詞化用法、「のだ」の説明の用法がまず使用されるようになり、上級になると「のだが」「というの」のような直接的でない言い回しを用いることで、より自然な日本語を使用するようになり、さらに超級では「のではないか」、「というのか」や、「のだ」「のか」の説明用法以外の用法を広く使用し、間接的表現、自問の表現も含め、用法の使用範囲が更に広がるということがわかった。本研究から示唆された「の」の各用法の大枠での習得段階は、第一段階が名詞化用法、「のだ」(説明告白、説明教示)、代用語、第二段階が「のか」(説明求め)、「のだが」(前置き、終助詞、逆接)、「というの」(一般化)、第三段階が「のではないか」(推測、主張)、「というのか」(自問)「のだ」(強調、確認)、「のか」(スコープ、確認)、「のだから」(理由)、「というの」(意味・定義)、第四段階が「のだ」(感嘆、非難)、「のか」(非難)、「の」(終助詞説明告白)であった。

[キーワード]

の OPI 英語話者 習得 誤用

1. はじめに

準体助詞「の」は、日本語の文を生成する上で非常に重要な役割を果たす。名詞の代用語、前接する用言の名詞化といった機能の他に、文末の「のだ」の形でムードを表したり、また「のだが」のような接続表現としての用法もある。名詞化のような文法的に必須のものは比較的早い段階で教えられ、習得の困難度も高くないと思われるが、「の」を用いることによって命題に心的要素が加わっているように見えるムードの用法は、「の」の使用が構文的に必須ではない場合もあり、その使用は学習者にとって容易とは言えないだろう。「の」を付けることによってより日本語らしくなったり、逆に過剰に使用することで本来の意図とは異なるニュアンスが含まれてしまう場合もあり、誤解を招く恐れもあることから、「の」の習得は、日本語で正しく意思を伝えるために欠かせないものであると言える。本稿は準

体助詞「の」の各用法が学習者の自然発話の中でどのように現れ、どのように習得されていくのかを考察することを目的とする。

筆者は、坪根（2002）でOPI（oral proficiency interview）データを用い、準体助詞「の」の各用法について韓国語話者の自然発話での使用状況を調査した。それに続くものとして、本研究では英語話者のOPIデータを用いて調査し、それに基づいて可能な限りその習得状況について考察する。

2. 調査の対象と方法

本研究で分析対象としたデータは、OPIデータの文字化資料(KYコーパス¹⁾)である。KYコーパスは英語・韓国語・中国語話者各30名、計90名のデータからなるが、本研究ではそのうち英語話者30名分を対象とした。レベル分けは初級5名、中級10名、上級10名、超級5名である。

以下で学習者に付けられている番号は、始めのEが母語が英語であること、2つ目のローマ字はOPIにおける判定結果（初級N、中級I、上級A、超級S）を表す。また3つ目にローマ字が付いている場合はサブレベルを表し、各レベルの中で下がL、中がM、上がHとなっている。例えばEIM04なら母語が英語、中級の中のレベルであることを示し、最後の2桁の数字は同じ母語、同じレベルのものの中での被験者識別番号である。

調査方法は坪根（2002）を踏襲するが、それに加え、implicational scaleを作成し、習得状況考察の参考とする。

3. 用法分類

「の」の用法の中で本研究で出現したものを使用例と共に示す。なお、OPIテストの相づちは省略、長い文で用法に無関係の部分は途中省略してある。

1) 名詞の代用語

この中には下記aのような格助詞+被修飾語の被修飾語部分が省略されたものと、bのような他の名詞の代用語として用いられているものの両方を含める。

- a. 金物のが入っているんですよ。(ES02)
- b. たぶん大好きなのは、焼き鳥とか。(EIH03)

2) 用言の名詞化

新しい人に会うのが楽しみです (EAH07)

3) のだ²⁾

「のだ」の「の」は元々は準体助詞であり、「のだ」で下記のような意味を持つのではなく、文脈の中で様々な意味を持つかのように振る舞うのだが、本研究ではそれを踏まえた上で、下記の文脈での使用という意味で分類し考察する。なお、以下の分類は坪根（2002）を踏

襲している。(以下、TはOPI テスター、Sは学習者)

- a. 説明／告白：私の、家は、2階、2階があるんです。(EIL04)
- b. 説明／教示：その子はすぐとらさんを相談相手にしたんです。(EIH04)
- c. 強調：ノーと言えない日本、でしょう、その通りなんですよね。(ES07)
- d. 意思：結局彼女は、あの、そういうところに、入れられないんですよってということにな
って (EAH02)
- e. 感嘆：この前コロラド州に帰ったら、もうあのカラオケの**まであるんですよ。(ES06)
- f. 発見：じゃあ僕も、浮気をしてもいいんだというふうに考えてしまうんではないかとん
一いう意見をもっています。(EAH06)
- g. 非難：建前、本音っていう分かれて育ちますと西海岸に行った時にすごい何なんだ、人
間を面白がっているのかとか色々言われましたね。(ES01)
- h. 確認：焼却所を作りたい〈はい、そうです〉んですね。(EAH07)
- i. 再認識：やっぱり人間は、人間の性格は違うんですね。(ES06)

4) のか

a 「自問」は、質問の形式であるが相手に聞いているのではなく、自分に問いかけ考えているもの(以下の「自問」も同じ)、e「スコープ」は文の構造上不可欠なもの(野田 1997)である。

- a. 自問：日本語でどういえばいいのかなあ。(EAH08)
- b. 疑問：応募者が少ない、〈{笑い}〉から選ばれたのかな。(EAH08)
- c. 説明求め：どこで、教えていらっしやるんですか。(EA01)
- d. 確認：じゃーもう経済には興味ないんですか。(EIH04)
- e. スコープ：どういうこと洗脳されているのか、わからないでしょう (ES07)
- f. 非難：大統領が同じ事言っているけれどもね、こう外から、見ると、何言うてんのやこの人、とね思うんですよ。(ES07)

5) というの

a 「一般化」は先行する具体的な名詞句／文の内容を抽象的概念にするもの、b 「内容」は具体的内容に続けて用い、「という」が引用的に用いられるもの、c 「意味・定義」は先行する事物の意味を説明するものである。

- a. 一般化：結婚というのは、とても大切なことですから (EAH06)
- b. 内容：どこまで、団体を大事にして、でまああの自分も、大事にことができると、
いうのも、あのー考える必要がある。(EAH06)
- c. 意味・定義：発音出来ないというのは難しいという意味ですけど (EAH07)

6) というのか (自問)

サッカーがね、あれだけ、ほつということに、大変な、人気っているのか、か大変な関心、

がなんだかわいてきてるんですねー。(ES02)

7) のだから (理由)

これからもまだこの地球上にはいるんだから、あの、たぶんまた会えるから、その日まで、じゃあね。(ES02)

8) のだが

a. 前置き：きのう聞いたんですけど、なぜあの経済、の勉強から、日本語の一、日本語日本語を、教える勉強に、変えたんですか。(EIH04)

b. 終助詞：日当たりの意味がちょっとわからないんですが。(EA03)

c. 逆接：上級に入りたいんですけど、(中略) できないと思います。(EIM05)

9) のではないか

a. 推測：伝統ですとか、両親の影響ですがね、結構それに従ってるんじゃないですか。(EAH02)

b. 主張：そういう場合だったら、まあ死つ刑してもいいんじゃないかと、思うんですけど。(EAH06)

10) の終助詞

a. 説明／告白：僕はアメリカの方はあんまり知らないの。(ES02)

b. 説明／教示：T たとえば何か一つぐらい具体的な例、あーもし
S (前略)こないだ、ね、大統領選挙がありましたでしょう。(中略)
それで、アメリカ人が一番すばらしい人とか、どうのこうのどのこの言うのね。(ES07)

c. 説明求め：だけどどんな本読んでるの。(ES02)

d. 非難：T もうちょっと一人になりたいから、ごめんね。

S あそれも用事なの。(ES02)

e. 確認：貴花田とりえが別れちゃったのね。(EAH02)

f. 自問：で、そのなんていうの、その、そのソフトが (EAH02)

4. 結果と考察

4-1. 各用法の出現分布の概要

表1は各用法の学習者別使用数を示したものである。表中の数字は正用数/誤用数で、数字が1つのものは正用の数を表す。表の2枚目最後に総使用数と正用カテゴリ数(正用した用法の種類の数)を示した。以下、項目別に見ていく。

代用語は中級-中以降で正用が出現するが、名詞化の用法は初級の段階から正用が見られ、上級で大きく増加する。この時期に名詞句を含む長くて複雑な文が生成されるようになるものと思われる。

表1 出現分布表 (の766例)

学習者	の 代用語	の 名詞化	の 説明告白	の 説明教示	の 強調	の 意思	の 感嘆	の 発見	の 非難	の 確認	の 疑問	の 非難	の 確認	の 自問	の スコープ	の 一般化	の 内容	の 意味・定義	の 自問	の 理由・根拠	の 理由
ENL01			0/1																		
ENM01																					
ENM02	1																				
ENH01		1																			
ENH02		1																			
小計	0	2	0/1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
EIL01	0/1		1																		
EIL02		1																			
EIL04			1																		
EIL05																					
EIM04		1																			
EIM05	2/1	2/2	4	7							0/1				0/1						
EIM06		2	1	1																	
EIM07	1	0/1	2	2							1										0/1
EIH03	1			1	1																
EIH04	1		2	6							1		4		1		1				
小計	5/2	6/3	12	17	1	0	0	0	0	0	2/1	0	4	0	0/1	1	0	1	0	0	0/1
EA01	1	4	2	3							2				2			1			0/2
EA02		2																			
EA03		3	6	2									1		0/1					1	0/3
EAH01		1/2		1												0/1					
EAH02	1	12	6	1		1							1			4			2		0/1
EAH03	1	7	2	1							1					1		2			0/1
EAH06	2	3	24	7	1		3						1		16	1	1	1	1		1/1
EAH07		5	9	3									2		5		1	1			
EAH08			6	1									2		1		1	1			
EAH09	1	1	3	5	1						1				2						
小計	5	27/2	64	29	2	1	0	3	0	5	0	14	6	2	7/1	25/1	1	6	6	2/1	1/7
ES01		3	7/1	11									4		2	2	0/1				1
ES02	7	2	25	3	1		4			1					7	1			2		1
ES05		2	2	1	2											3					0/1
ES06			5/1	6			1								1				1		1
ES07	1	6	35	3	5								1		1						
小計	8	13	74/2	24	8	0	5	0	2	2/1	1	0	5	1	3	1	1	0	5	0	3/3
使用数計	18/2	48/5	150/3	70	11	1	5	3	2	7/1	1	16/1	11	5	18/2	34/1	2/1	7	11	2/1	4/11

(表中、数字が2つ書いてあるものは正用数/誤用数、数字が1つのは正用数を表す。)

学習者	のだが 前置き	のだが 終助詞	のだが 逆接	のだったら 条件	のだから 推測	のだからか 自問	のでは ないか推測	のでは ないか主張	のでは ないか主張	ではないの だろうか主張	のではないの だろうか主張	の終助詞 説明告示	の終助詞 説明求め	の終助詞 非難	の終助詞 確認	の終助詞 自問	総使用数	正用カテ ゴリー数
ENL01																	0/1	0
ENN01																	0	0
ERN02																	1	1
ENH01																	0	0
ENH02																	1	1
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2/1	平均 0.4
EIL01																	1/1	1
EIL02																	1	1
EIL04																	1	1
EIL05												1					1	1
EIM04	4		2													1	9	5
EIM05	2	4	2													1	23/5	7
EIM06																	4	3
EIM07			1														7/2	5
EIH03																	3	3
EIH04	2																3	3
小計	8	4	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	18	8
EA01	4	2/1															68/8	平均 3.5
EA02	2	4															21/3	9
EA03	3	8						2									12	6
EAH01																	25/4	8
EAH02	23	9	4	1	1												3/4	3
EAH03	1	1															72/1	17
EAH06	19	4	9			1											18/1	10
EAH07	11	5	1													1	111	19
EAH08	7	8	3														49/2	14
EAH09	5	6	3														38/1	12
小計	75	47/1	21	1	2	1	15	12	12	0	2/1	0	0	0	1	3	388/16	平均 11.4
ES01	18	7	2														58/2	11
ES02	1	2															70	20
ES05	5	1	2														18/1	8
ES06	6	1	1														27/1	12
ES07	17	14	3														103/3	22
小計	47	25	8	0	0	0	5	4	4	1	0	7	1	1	1	0	276/7	平均 14.6
使用数計	130	76/1	34	1	2	1	20	16	16	1/1	0/1	8	1	1	1	4	734/32	

「のだ」は説明告白が圧倒的に多く、説明教示がそれに次ぐが、両者とも中級-中から急激に使用が伸びる。それ以外の用法は上級-上以降で使用されている。「のだ」の疑問形「のか」は中級-中から少数見られ、上級で広く使用される。

「というの」は「一般化」「意味・定義」が中級-上で各1例見られ、その後上級-上で多くの学習者に使用されるが、「内容」は使用例がわずかであった。

「というのか」、「のか」、終助詞「の」の自問の用法は、中級で終助詞「の」の使用が1例見られるが、主に上級-上以降で使用されている。これらを使うことにより、自分の中で表現を選択したり、思い出したりしているような時にも自然な流れで話を進めることができるようになると考えられるが、そのような自然さは上級-上の段階でようやく見られるようになるということであろう。

「のだから」は上級までは誤用が圧倒的に多い。超級になって正用者が増えるがなお誤用が見られ、この用法の難しさを表している。

「のだが」は中級-中から使用され始め、上級になると特に「前置き」「終助詞」の用法はほとんどの学習者が使用するようになり、より自然な話し言葉になっていると言える。また、「のではないか」も上級になって現れ、間接的表現を使って意思を表すようになっている。スコープの「のか」「のではない」も上級になって正用が現れるものである。

終助詞はロールプレイ中の子供を相手にした場面などに使用が限られるため、多くは出現していないが、前述した「自問」以外では「のだ」でも多く使用が見られた「説明告白」で複数例使用されている。

正用カテゴリー数の各レベルの平均を見ると、初級は0.4、中級で3.5と増え、上級ではその3倍以上の11.4、超級でも若干増加して14.6となっており、レベルが上がるにつれて順調に正用カテゴリーが増えている。表中では示していないが、更に細分化して計算すると、中級-下では正用カテゴリー数の平均が1、中級-中上では5.2となり、中級-中上でいったん大きく伸びて、更に上級でその2倍に増加するということになっている。使用数も徐々に増加しているが、特に中級-中上、上級で使用数が急増する。ただし、使用数の多さは必ずしも母語話者に近づいているとは判断できず、母語話者との比較をする必要がある。

4-2. 習得状況

表1より各レベル毎の正用人数（1つでも正用のあった人の数）をまとめたものが表2である。習得状況を細かく見るため、正用カテゴリー数、総使用数で大きな伸びが見られた中級-中上（6名）と中級-下（4名）とを分けて集計した。

更に、表2を基にレベル別習得状況を表3としてまとめた。OPIという性格上、多くの出現を期待できない用法もあり、各用法を同じように議論することはできないが、少な

表2 レベル別正用人数(一つでも正用のあった人の数)

レベル	の 代用語	の 名詞化	の 説明告白	の 説明教示	の 強調	の 意思	の 感嘆	の 発見	の 非難	の 確認	の 再認識	の 説明求め	の 疑問	の 非難
初級(5)	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級下(4)	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級中上(6)	4	3	5	5	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0
上級(10)	4	9	8	9	2	1	0	1	0	4	0	5	2	0
超級(5)	2	4	5	5	3	0	2	0	2	2	1	0	0	2

レベル	の 確認	の 自問	の スコープ	の 一般化	の 内容	の 意味・定義	の 自問	の 理由・根拠	の 理由	の 前置き	の 終助詞	の 逆接	の 条件	の 推測
初級(5)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級下(4)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級中上(6)	1	0	0	1	0	1	0	0	0	3	1	3	0	0
上級(10)	4	2	2	6	1	5	3	2	1	9	9	6	1	2
超級(5)	1	1	4	4	1	0	3	0	3	5	5	4	0	0

レベル	の 自問	の 推測	の 主張	の 確認	の 非難	の スコープ	の 説明教示	の 説明告白	の 説明求め	の 非難	の 確認	の 自問
初級(5)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級下(4)	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
中級中上(6)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
上級(10)	1	5	4	0	0	2	0	0	0	0	1	2
超級(5)	0	3	3	1	0	0	1	2	1	1	0	0

は正用人数が60%以上のもの
は正用人数が30%以上60%未満のもの

くとも多くの学習者によって使用（正用）されているものについては、そのレベルで習得が進んでいるものと考えることができる。そこで、各レベルで 60%以上の正用者がいる用法を習得段階が高いもの、30%以上 60%未満のものを少なくとも習得が始まったと考えられるものと規定し、それをまとめたものが表3である。初めてその割合に達した用法が各欄に入れてある。

表3 レベル別習得状況

レベル	習得段階（高）：正用者 60%以上	習得段階（初）：正用者 30～60%
初級		の名詞化
中級-下		のだ説明告白
中級-中上	の代用語 の名詞化 のだ説明告白、説明教示	のか説明求め のだが前置き、逆接
上級	のか説明求め というの一般化 のだが前置き、終助詞、逆接	のだ確認 のか確認 というの意味・定義 というのか自問 のではないか推測、主張
超級	のだ強調 のかスコープ というのか自問 のだから理由 のではないか推測、主張	のだ感嘆、非難 のか非難 の終助詞説明告白

表3を見ると、初級段階からすでに名詞化用法の正用が見られ、中級-下では「のだ」（説明告白）の習得が始まっている。この2つの用法は中級-中上で習得が進み、代用語、「のだ」（説明教示）とともに習得段階（高）になっており、これら4つは最も早く習得される用法であると推測される。「のか」（説明求め）、「のだが」（前置き、逆接）もこの段階で習得が始まっていると考えられる。

上級では中級-中上で習得段階（初）だった「のか」（説明求め）、「のだが」（前置き、逆接）の正用者が増え、習得段階が進んでいる。それに加え、それまでほとんど正用者のいなかった「というの」（一般化）、「のだが」（終助詞）も一気に習得が進み、習得段階（高）に現れている。この段階では、「のだ」（確認）、「のか」（確認）、「というの」（意味・定義）、「というのか」（自問）、「のではないか」（推測、主張）の習得が見られるようになる。

更に超級では、それらの中の「というのか」(自問)、「のではないか」(推測、主張)の習得が進み、上級まででは習得段階(初)にも現れていなかった「のだ」(強調)、「のか」(スコープ)、「のだから」(理由)も習得段階(高)となっている³⁾。

上記表3において習得が示唆された22の用法について、Implicational scaleを作成し、その習得状況をさらに検討してみる(表4)。Implicational scaleは本来、統計処理を行うものであるが、本研究は被験者数が少ないため表のみを参考として作成し、統計処理は行わない。表4は、学習者毎に正用があった用法には1、なかった用法には0を入れ、レベルに関係なく正用数(正用した用法の数)の少ない学習者から順に上から下へ並び、また、正用者数の多い用法から順に左から右へ並べたものである。これを見ると、表3において中級-中上レベルで正用者60%以上となり、最も早く習得される項目だとされた4つのうち、代用語を除く名詞化用法、「のだ」(説明告白、説明教示)の3つの用法は、一番左側に位置し、最も早い段階で習得されることを示唆している。次いで、表3においても上記4用法の次に上級レベルで習得段階(高)となった「のだが」(前置き、終助詞、逆接)、「というの」(一般化)、「のか」(説明求め)と、代用語が続いている。超級レベルで習得段階(高)となっていた「のではないか」(推測、主張)、「というのか」(自問)、「のか」(スコープ)、「のだ」(強調)、「のだから」(理由)は、上級レベルでは習得段階(初)でその後習得段階(高)には現れなかった「のだ」(確認)、「のか」(確認)、「というの」(意味・定義)と混在した形で続いている。これらの用法の更に詳細な習得順序までは議論できないが、少なくともこれらはそれ以前に使用されるものからは遅れて習得されるということが表3、4の結果からは示唆されている。そして、表4の一番右側には、表3で超級レベルでも習得段階(初)にとどまっていた「の」(終助詞説明告白)、「のだ」(感嘆、非難)、「のか」(非難)が位置し、22用法の中では最も習得が遅いことを表している。このように、表4の結果もほぼ表3の結果を裏付けるものとなっている。今回の調査では調査人数が少なく、詳細な習得順序の提案まではできないが、表3及び表4の結果より、大枠では以下のような習得段階の可能性が考えられるのではないだろうか。

第一段階：名詞化用法、「のだ」(説明告白、説明教示)、代用語⁴⁾

第二段階：「のか」(説明求め)、「のだが」(前置き、終助詞、逆接)、
「というの」(一般化)

第三段階：「のだ」(強調、確認)、「のか」(スコープ、確認)、
「というの」(意味・定義)、「というのか」(自問)、「のだから」(理由)、
「のではないか」(推測、主張)

第四段階：「のだ」(感嘆、非難)、「のか」(非難)、「の」(終助詞説明告白)

以上のことを総合的にまとめると、中級-中上の段階まででまず代用語、名詞化、「のだ」の説明の用法が多く使用されるようになり、上級になると「のだが」「というの」のような直接的でない言い回しを使用することで、より自然な日本語を使用するようになり、さらに、超級では「のではないか」のような間接的表現、「どうか」のような自問の表現や、「のだ」「のか」の説明用法以外の用法を広く使用し、用法の使用範囲が更に広がって豊かな日本語を使用するようになると考えられる。

4-3. 誤用例

韓国語話者の調査で多く見られた「のだ」(説明告白)、「のか」(説明求め)、「のだから」の誤用は、英語話者においても出現しているが、「のだから」以外は韓国語話者と比べて極端に少なくなっている。本稿では名詞化用法の「の」、「のだ」(説明告白)、「のだから」の3つについて、代表的な誤用を示す⁹⁾。

1) の名詞化

例：一番はやっているは教会で結婚式する。(EAH01)

「一番はやっているのは教会で結婚式することです」と言うべきところであるが、「の」が抜けた誤用である。本項目の誤用5例はすべて上記例のような非用であった。上級でも1名ではあるがこのような誤用が現れている。

2) のだ (説明告白)

例：T えっと、Sさん、お国はどちらですか

S えっと、アメリカなんですよ、〈あ、そうですか〉はいはい (ES06)

この例では、自分の出身について説明しているということで「のだ」を使用しているのだと思われるが、相手の質問に対して単に答えているだけであるので「のだ」は必要ない。このような誤用は韓国語話者で非常に多く見られたものであるが、英語話者ではあまり見られない。

3) のだから

例：わたしは午前中は日本語学校で、勉強しているんですから、あの昼間のほうがいいですが (EA03)

この誤用も韓国語話者で非常に多く見られたものであるが、英語話者でも上級まではほとんどが誤用の文脈で使用されている。

5. まとめと今後の課題

本研究では準体助詞「の」の各用法について自然発話での使用と習得状況について考察した。その結果、「の」の使用数、正用カテゴリ数(正用した用法の種類の数)ともにレベルが上につれて徐々に増加するが、特に中級-中上、上級の段階で急増することがわか

った。用法別に見ると、中級-中上までで、代用語、名詞化、「のだ」の説明の用法が多く使用されるようになり、上級になると「のだが」「というの」のような直接的でない言い回しを用い、より自然な日本語を使用するようになり、さらに超級では「のではないか」、「と
いうのか」、「のだ」「のか」の説明用法以外の用法を広く使用し、間接的表現、自問の形式も含めて、用法の使用範囲が更に広がるということがわかった。また、本調査から示唆される「の」の各用法の大枠での習得段階については4-2.で述べた通りである。

本研究では、坪根（2002）に続き、OPIデータを用いて準体助詞「の」の使用と習得状況について自然発話の資料を用いて考察した。今後、用法毎の習得順位を提案するにはさらに被験者数を増やすことが必要である。また、これら横断的調査によって得られた結果を検証するためには縦断的調査も必要であろう。OPIというデータの性質上、今回は出現数が少ない、あるいは出現しなかったために論じることのできなかつた用法については、発話環境を整えることによって、その習得について検証するという方法も考えられよう。今後は中国語話者について分析し、韓国語話者、英語話者との比較も行うつもりである。

注

- 1) 「KY コーパス」とは文部省科学研究費補助金・基盤研究『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』（研究代表者カッケンブッシュ寛子）において鎌田修氏と山内博之氏を中心となって行ったOPIの文字化資料を指す。
- 2) 「のだ」には「んだ」「のです」「んです」等文体上異なるものも含めることにする。以下の用法も同様。
- 3) 坪根（2002）の韓国語話者に関する調査では、「のだから」の正用は上級の1例のみで、超級においても正用が見られず、習得されたとは言えなかったが、本調査では超級での習得が示唆されている。ただし、誤用も多くまた正用例も各1例ずつであるため、今後更に検証する必要がある。
- 4) 代用語は表4の結果からは次の段階となっているが、表2において中級-中上レベルで正用人数が多く、その後上級、超級レベルで割合的に低くなっているという状況を考え、第一段階に入れた。
- 5) 分析については坪根（2002）と重複するため、ここでは繰り返さない。

参考文献

金銀淑（1989）「連体修飾構造における『トイウ』の意味機能」『国語学研究』29、東北大

- 学文学部『国語学研究』刊行会、pp. 21-34
- 田中真理（1999）「OPIにおける日本語ヴォイスの習得状況：英語・韓国語・中国語話者の場合」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』、pp. 335-350
- 坪根由香里（1994）『『もの』『こと』『の』に関する考察 -その意義素を求めて-』、未公開修士論文、南山大学
- 坪根由香里（2002）「OPIにおける韓国語話者の『の』の使用と習得」『小出記念日本語教育研究会論文集』10、pp. 55-70
- 野田春美（1997）『「の（だ）の機能』くろしお出版
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 吉田茂晃（1988）「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15、神戸大学文学部国語国文学会、pp. 46-55